〔論　説〕

孔子の倫理哲学論（４）
―道徳論を中心として―

浅　井　茂　紀

目　次

Ⅰ　序　　論

Ⅱ　本　　論

第１節　孔子の聖

第２節　孔子の賢

第３節　孔子の生

第４節　孔子の富

第５節　孔子の倫

Ⅲ　結　　論

Ⅰ　序　論

論者は，「**孔子の倫理哲学論（４）―道徳論を中心として―**」と題して**論説**する。

その目次は前記の如しである。そして，「孔子の倫理哲学論（４）」（以下，この論文では先のサブ･タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと，且つ，カントの『純粋理性批判』での「哲学する」（philosophieren）[(1)]ことや異文化で，宗教上のイエス･キリスト（Jesus Christ）の「いのちに至る門は小さく，その道は狭く，それを見いだす者はまれです。（マタイ，７―14）[(2)]や「金持ちが神の国にはいるよりは，らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」（ルカ，18―25）[(3)]などとある言葉やキリスト教の根本的原理である「愛」（agapê），これらの認識や意識においても，この論文は，「孔子の倫理哲学論（４）」と題して考察することも可能であろう。

論者は，「孔子の倫理哲学論（３）」[(4)]，「孔子の倫理哲学論（２）」[(5)]，「孔子の倫理哲学論（１）」[(6)]，「孟子の良心哲学論―良知良能と関連して―」[(7)]などの論説でも，すでに儒教や儒学，孔子（Confucius，552/551-479B.C.）や孟子（Mencius，372-289B.C.）の哲学などについて多少なりともリサーチ（researches）を実践してきた。

従って，今回もそれらのシリーズ（series）として記述する。今回のこの論説は，以前のそれらの続きでもある。最初に，

１．孔子の聖について，聖とは何かを問題にする。もし民全体に恩恵を施し，民衆を救済できたら，それは孔子哲学の根本的原理の仁といえるかというと，孔子は，それは仁どころか，必ず聖としている。それでは，その聖人とは誰であるかという疑問が起きよう。

２．孔子の賢について，賢とは何かを問題にする。自己にまさった賢人を見ては，自分もその賢人になろうと思うであろうが，孔子はどうであったかということである。また，孔子は，どういう人々を賢人と見なしたか，興味と関心のあるところであろう。

３．孔子の生について，生とは何かを問題にする。孔子は，生死をどのように認識してい

---

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865-A838, B866, S. 752-753.
カント『純粋理性批判』（下）篠田英雄訳，岩波書店，昭和41年，128ページ，参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書，*The New Testament*』（英和対照）日本聖書刊行会，昭和52年，16ページ。
“For the gate is small, and the way is narrow that leads to life, and few are those who find it. (Matthew, 7-14).

(3) ibid., p.212. “For it is easier for a camel to go through the eye of a needle, than for a rich man to enter the kingdom of God.” (Luke, 18-25).

(4) 拙稿「孔子の倫理哲学論（３）―道徳論を中心として―」（論説）『千葉商大紀要』第45巻第３号，千葉商科大学国府台学会，2007（平成19）年12月31日発行，１―12ページ。

(5) 拙稿「孔子の倫理哲学論（２）―道徳論を中心として―」（論説）『千葉商大紀要』第44巻第３号，千葉商科大学国府台学会，2006（平成18）年12月31日発行，１―12ページ。

(6) 拙稿「孔子の倫理哲学論（１）―道徳論を中心として―」（論説）『千葉商大紀要』第43巻第３号，千葉商科大学国府台学会，2005（平成17）年12月31日発行，83―99ページ。

(7) 拙稿「孟子の良心哲学論―良知良能と関連して―」（論説）『千葉商大紀要』第41巻第３号，千葉商科大学国府台学会，2003（平成15）年12月31日，21―37ページ。また，拙著『哲学要論』，高文堂出版社，2006（平成18）年２月２日，５刷発行，181―223ページ，など。

たかである。人を愛していれば，誰しもがその人の長生きを念願するであろう。人間は，生命は大切であるが，それよりも大事なものが存在するかという問題も考慮されよう。
４．孔子の富について，富とは何かを問題にする。富貴は人々の欲するところであるが，逆に，貧賤の境遇に陥った時の場合，君子はいかなる方法で名を成すであろうか。富貴だけあれば，人間は真に幸福であるかという問題でもあろう。
５．孔子の倫について，倫とは何かを問題にする。自分の志を高尚にし，自己の身を高潔にしておく場合と，逆に，自分の志を卑下し，他人からの侮辱も甘受して，自己の身の処し方は清浄の場合など，孔子は，どういう生き方を理想としたかが問題になろう。さらに，孔子や孟子の「大倫」の熟語の意味の相違にも触れてみよう。

かくして，中国の春秋時代，聖人･孔子は，何故これら聖，賢，生，富，さらに，倫などの倫理（Ethics;Ethik;éthique）や道徳哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学（Ethical philosophy）は，人間としての基本的な理念（Idee）ではなかろうかと，論者は思考するのである。

次に，Ⅱ　本論　第１節　孔子の聖から説明する。

Ⅱ　本　論

第１節　孔子の聖

『論語』における孔子の聖，すなわち，孔子の言う聖とは何かを問題にしてみる。
□□子曰く，何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。（雍也６），（傍点筆者）[8]。

孔子の弟子･子貢が，もし民全体に恩恵を施し，民衆を救済できたら，仁といえますか，という質問に対して，孔子は，「それは仁どころか，必ず聖といってよい」と答えている[9]。孔子は，仁よりも聖により価値を置く。この「聖」（a sage）[10]は聖人の意義である。
□□子曰く，聖人は吾得て之を見ず。君子者を見ることを得ば，斯（ここ）に可なり。子曰く，善人は吾得て之を見ず。恒（つね）有る者を見ることを得ば，斯（ここ）に可なり。云々。（述而７），（傍点筆者）[11]。

---

(8) 子貢曰，如有博施於民，而能濟衆，何如。可謂仁乎。子曰，何事於仁。必也聖乎。（雍也６），（傍点筆者）。宋朱子（朱熹）集註『四書集註』香港太平書局，1964年，論語巻之三，雍也第六，40ページ。宋朱子（朱熹）集注『四書集注』台湾中華書局，中華民國66年，論語巻之三，雍也第六，15ページ。慧豊學會『漢文大系』（一），新文豊出版公司，中華民國83年，論語集説，巻２，雍也第６，56ページ。四部叢刊経部。『漢文大系』壹（大學説，中庸説，論語集説，孟子定本），冨山房，明治43年，論語集説，巻２，雍也第６，56ページ。

(9) 吉田賢抗『論語』（新釈漢文大系，第１巻）明治書院，昭和35年，145ページ。

(10) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS*, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIUS, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.194. レッグは，この書（*THE CHINESE CLASSICS*）で，『論語』（CONFUCIAN ANALECTS）のこの節（雍也６）を以下の如く訳している。
Tsze-kung said, ‘Suppose the case of a man extensively conferring benefits on the people, and able to assist all, what would you say of him? Might he be called perfectry virtuous?’
The Master said, ‘Why speak only of virtue in connexion with him? Must he not have the qualities of a sage?

孔子が言う，今の世で自分は「聖人」（A sage）[12]を見ることは出来ない。君子を見ることが出来れば，斯に良いが困難である。続けて，孔子が言う，今の世で自分は善人を見ることは出来ない。恒産なくして恒心ある者（士）を見ることが出来れば，斯に良いが困難であると述べている。従って，孔子は，春秋時代の当時，偉大な倫理，道徳的な人格者である聖人を見ることは出来ないとしているのである。それどころか，君子や善人，士を見ることも困難であるとしている。この当時では，孔子は，孔子自身はもとよりのこと，顔淵（顔回）など自分の弟子達，さらに，他の誰をも孔子は聖人と規定していない。

次に，孟子における聖人の概念について説明する。

□□昔者子貢孔子に問うて曰く，夫子は聖なるか，と。孔子曰く，聖は則ち吾能わず。我は學びて厭わず，教えて倦まざるなり，と。子貢曰く，學びて厭わざるは，智なり。教えて倦まざるは，仁なり。仁且つ智なり。夫子既に聖なり，と。夫（そ）れ聖は孔子も居らず。是れ何の言ぞや，と。（公孫丑上）[13]。昔，子貢が孔子に質問して「先生は聖人ですか」と。孔子は，「聖人には自分は当てはまらない。自分は学問して厭わず，人を教えて飽きることがないだけである」と言う。子貢が言う，「学問して厭わざるは，智である。教えて飽きることがないのは，仁である。仁者であり，且つ，智者である孔子先生は，既に聖人である」と[14]。『孟子』書にも，孔子自身の言葉として，「聖は則ち吾能わず」，すなわち，聖人には自分は当てはまらない，という記載が存在する。但，子貢が，「仁且つ智なり。夫子既に聖なり」として孔子を聖人と是認していることが判明する。

□□孔子は，聖の時なる者なり。孔子を之（こ）れ集めて大成すと謂う。（万章下）[15]。

孔子は，聖人中，その時のよろしきに従い自在に正しく行為する人である。それ故に孔子を，すべての道徳を集合して大成した聖人と名づけるのである[16]。

亜聖･孟子は，孔子を「聖」，すなわち，聖人と見なしているのである[17]。

ゆえに，孔子の聖では，「子曰く，何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。」（雍也６）とあるように，この「聖」（a sage）は聖人の意義である。孔子は，「聖人は吾得て之を見ず。」（述而７）と言っている。今の世で聖人を見ることが出来ないだけでなく，孔子自身も聖人（A sage）と認めていない。次に，戦国時代の亜聖･孟子は，「孔子は，聖の時なる者なり。」（万章下）として，孔子を聖人と是認していると，論者は考えるのである。

⑾ 子曰，聖人吾不得而見之矣。得見君子者，斯可矣。子曰，善人吾不得而見之矣。得見有恆者，斯可矣。（述而７），（傍点筆者）。

⑿ 注⑽参照。James Legge，*op. cit.*（*THE CHINESE CLASSICS*），p.203.

⒀ 昔者子貢問於孔子曰，夫子聖矣乎。孔子曰，聖則吾不能。我學不厭，而教不倦也。子貢曰，學不厭，智也。教不倦，仁也。仁且智。夫子既聖矣。（公孫丑上），（傍点筆者）。

⒁ 内野熊一郎『孟子』（新釈漢文大系，第４巻）明治書院，昭和37年，99ページ。

⒂ 孟子曰，伯夷，聖之清者也。伊尹，聖之任者也。柳下惠，聖之和者也。孔子，聖之時者也。孔子之謂集大成。（万章下），（傍点筆者）。

⒃ 注⒁参照。内野熊一郎，前掲書，351ページ。

⒄ 聖人，君子などに関しては，拙稿「孟子の人物哲学論―孔子と孟子の哲学を比較して―」（論説）『千葉商大紀要』第36巻第１号，千葉商科大学国府台学会，1998（平成10）年６月30日発行，１―24ページ，参照。

第２節　孔子の賢

孔子の賢，すなわち，孔子の言う賢とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く，賢を見ては，齊（ひとし）からんことを思い，不賢を見ては内に自ら省（かえり）みるなり。（里仁４），（傍点筆者）[18]。

孔子が言う，賢，すなわち，自己に優ったすぐれた人を見ては，自分もそのような人になろうと思い，つまらぬ人を見ては，自分もこのような者ではないかと反省する。この賢（men of worth）は，自己に優ったすぐれた人の意味であろう。

□□子曰く，賢なる哉（かな）回（かい）や。一簞（たん）の食（し），一瓢の飲，陋巷（ろうこう）に在り。人は其の憂いに堪えず。回や其の樂しみを改めず。賢なる哉回や。（雍也６）[19]。

孔子が言う，賢明だなあ顔回は。一椀の飯，一椀の汁で，陋巷，狭い小さな路地に住んでいる。普通の人はその貧苦に堪え切れないが，顔回は相変わらず道を楽しみ学問している。さすが賢人だなあ顔回は[20]。この賢は，賢明や賢人の意義である。

□□子曰く，臧文仲（ぞうぶんちゅう）は其れ位を竊（ぬすむ）者か。柳下恵の賢を知りて，而も與（とも）に立たざるなり。（衛霊公15）[21]。

魯の大夫･臧文仲は，その地位としての俸給盗人というべき者であろうか。柳下恵という賢人を知りながら，しかも一緒に朝廷に立って善い政治をしなかった。孔子は，柳下恵を賢人と見なしている。

□□冉有（ぜんゆう）曰く，夫子は衛の君を爲（たす）けんかと。子貢曰く，諾，吾將に之を問わんとすと。入りて曰く，伯夷･叔齊は何人ぞやと。曰く，古の賢人なりと。曰く，怨みたるかと。曰く，仁を求めて仁を得たり。又何をか怨みんと。出でて曰く，夫子は爲けざるなりと。（述而７），（傍点筆者）[22]。

子貢が，部屋に入って，「伯夷･叔齊はどういう人でございますか。」と問うた。すると，孔子は，「昔の賢人だよ。」と答えた。このように，『論語』では，伯夷･叔齊の両人は，仁を求めて仁を得たところの賢人達（worthies）であった内容の記載が存在する。

従って，孔子が，伯夷と叔齊の２人を賢人と是認していたことが判明するのである。

その他，『論語』では，賢者，賢友，大賢があり，反対に不賢もある。また，賢を賢（まさ）ると読む例もある[23]。次に，孟子の賢の概念を説明する。

□□曰く，國君賢を進めるには，已（や）むことを得ざるが如くす。（梁恵王下）[24]。

---

⑱　子曰，見賢思齊焉，見不賢而内自省也。（里仁４），（傍点筆者）。

⑲　子曰，賢哉回也。一簞食，一瓢飲，在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。（雍也６）。

⑳　注⑼参照。吉田賢抗，前掲書，131ページ。

㉑　子曰，臧文仲，其竊位者與。知柳下惠之賢，而不與立也。（衛霊公15）。

㉒　冉有曰，夫子爲衛君乎。子貢曰，諾，吾將問之。入曰，伯夷･叔齊何人也。曰，古之賢人也。曰，怨乎。曰，求仁両得仁。又何怨。出曰，夫子不爲也。（述而７）。

㉓　注（17）参照。拙稿，前掲論文（「孟子の人物哲学論―孔子と孟子の哲学を比較して―」），１―24ページ参照。例えば，『論語』における賢者，賢友，大賢の節については，「子曰，賢者辟世。」（憲問14），「楽多賢友益矣。」（季氏16），「我之大賢與，於人何所不容。」（子張19）などがあり，「賢（まさ）る」と読む節は，「仲尼豈賢於子乎。」（子張19）などの記載が存在する。

㉔　曰，國君進賢，如不得已。（梁恵王下）。

この賢は，賢者の意味である。もっとも，孟子には，「賢者」の熟語もある。
□□孟子對えて曰く，賢者にして後此を樂しむ。（梁恵王上）[25]。
□□曰く，文王は何ぞ當る可けんや。湯より武丁に至るまで，賢聖の君六七作る。（公孫丑上）[26]。
孟子には，「賢聖」の熟語があり，賢労，賢王，仁賢などの熟語もある。
ゆえに，孔子の賢では，「子曰く，賢を見ては，齊からんことを思い」（里仁４）とあり，自己に優ったすぐれた人の意味である。さらに，「子曰く，賢なる哉回や。」（雍也６）とあり，賢明や賢人の意義であろう。孔子は，顔回や柳下恵，伯夷と叔齊を賢人達と是認している。次に，孟子の賢については，「孟子對えて曰く，賢者にして後此を樂しむ。」（梁恵王上）とあり，「賢者」の熟語があり，正に，賢者の意味である。さらに，孟子では，「賢聖」などの熟語も存在すると，論者は考えるのである。

第３節　孔子の生

孔子の生，すなわち，孔子の言う生とは何かを問題にしてみる。
□□季路鬼神に事えることを問う。子曰く，未だ人に事えること能わず，焉（いずく）んぞ能く鬼に事えんと。敢えて死を問う。曰く，未だ生を知らず，焉んぞ死を知らんと。（先進11），（傍点筆者）[27]。
季路が，鬼神につかえる事を質問した。孔子は，「まだ人につかえることもできないのに，どうして神霊につかえようか。」と答えた。さらに，季路が，あえて死について質問した。孔子が言う，「まだ生きるということも本当に知らないで，どうして死のことが分かるものか。」と[28]。この「生」（life）は，生きるという意義である。
□□子張，徳を崇くし惑いを辨ぜんことを問う。子曰く，忠信を主とし，義に徙（うつ）るは，徳を崇くするなり。之を愛しては其の生を欲し，之を悪みては其の死を欲す。既に其の生を欲し，又其の死を欲するは，是れ惑いなり。（顔淵12），（傍点筆者）[29]。
子張が，徳を高くし惑いをはっきりと解く方法を問う。孔子が言う，誠実とまことを主に守り，万事宜しきに従うことが，その徳を高くすることである。人を愛しては，その人がいつまでも生きることを欲し，人を憎んでは，その人の死ぬことを願う。本来，人の生死は天命で，愛した時には生きることを欲し，また憎んだ時には死を願うのは，心の惑いの状態というのである[30]。この「生」も，生きるという意味であろう。
□□子曰く，志士仁人は，生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。（衛霊公15）[31]。

---

(25) 孟子對曰，賢者而後樂此。（梁恵王上）。
(26) 曰，文王何可當也。由湯至於武丁，賢聖之君六七作。（公孫丑上）。
(27) 季路問事鬼神。子曰，未能事人，焉能事鬼。敢問死。曰，未知生，焉知死。（先進11），（傍点筆者）。
(28) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，236ページ。
(29) 子張問崇徳辨惑。子曰，主忠信，徙義，崇徳也。愛之欲其生，悪之欲其死。既欲其生，又欲其死，是惑也。（顔淵12）。
(30) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，264ページ。
(31) 子曰，志士仁人，無求生以害仁。有殺身以成仁。（衛霊公15）。

孔子が言う，志士や仁人は，生命が惜しいために仁の徳を害することはしない。自分の身を犠牲にしても仁の道を成し遂げる場合がある。これは，勿論，生命は大切であるが，それよりも仁徳の方がより大切だからである。この「生」は，命，生命の意味である[32]。

□□君，生を賜わるときは，必ず之を畜（やしな）う。（郷党10），（傍点筆者）[33]。

君主から，生きた動物を賜わると，必ずそれを飼育した。この文章は，孔子が，君主に礼で仕える数例の中の一例である。この「生」は，生きた動物を意味する。

なお，『論語』における「生」では，「生きる」，「生まれながら」や「生ず」の意味とか，「先生」や「死生」の熟語なども存在する[34]。次に，孟子の死について，

□□生を養い死を喪して憾（うらみ）無きは，王道の始めなり。（梁恵王上）[35]。

この「生」は，生きている者，生者という意味である。

□□孟子曰く，生を養うは，以て大事に當るに足らず。惟（ただ）死を送るは，以て大事に當る可し，と。（離婁下）[36]。この「生」は，生きている時，生前の意義である。

ゆえに，孔子の生では，「曰く，未だ生を知らず，焉んぞ死を知らんと。」（先進11）とあり，この「生」は，生きるの意味である。さらに，「子曰く，志士仁人は，生を求めて以て仁を害すること無し。」（衛霊公15）などとあり，この「生」は，命，生命の意味などである。次に，孟子の生では，「生を養い死を喪して憾無きは，王道の始めなり。」（梁恵王上）とあり，生者の意味である。さらに，生前の意義などがあると，論者は考えるのである。

第４節　孔子の富

孔子の富，すなわち，孔子の言う富とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く，富と貴とは，是れ人の欲する所なり。其の道を以てせざれば，之を得ても處（お）らざるなり。貧と賤とは，是れ人の悪む所なり。其の道を以てせざれば，之を得ても去らざるなり。君子仁を去りて，悪（いづ）くにか名を成さん。（里仁４），（傍点筆者）[37]。

孔子が言う，富と貴，すなわち，富貴は人情の欲するところである。これを求めて悪いことはないが，しかし，その仁徳の道でなければ，君子は富貴を得たとしても安んじない。貧賤は人のいやがるところである。仁徳による方法でなければ，貧賤であっても去ろうとしない。君子は仁から離れ去りて，どうして君子たるの名を成すことができようか。

この富（riches）とは，禄を得ることの意味である。貴（honours）とは，政治上の高い地位の意味であろう。

□□子曰く，富にして求む可くんば，執鞭の士と雖も，吾も亦之を爲さん。（述而７）[38]。

---

(32) 生命哲学が重要である。現今の高齢化社会では，生死の問題も課題であろう。

(33) 君賜生，必畜之。（郷党10）。この生は，生き物で，牛，羊，豚の家畜など。

(34) 「子曰，我非生而知之者。」（述而７），「君子務本。本立而道生。」（学而１），「有酒食，先生饌。」（為政２），「死生有命，富貴在天。」（顔淵12），等々。

(35) 養生喪死無憾，王道之始也。（梁恵王上）。この生は，生きている人々を言う。

(36) 孟子曰，養生者，不足以當大事。惟送死，可以當大事。（離婁下）。

(37) 子曰，富與貴，是人之所欲也。不以其道，得之不處也。貧與賤，是人之所悪也。不以其道，得之不去也。君子去仁，悪乎成名。（里仁４），（傍点筆者）。

(38) 子曰，富而可求也，雖執鞭之士，吾亦爲之。如不可求，從吾所好。（述而７）。

孔子が言う，富というものが，もし求めて得られるものであるならば，王侯の足軽といえども，甘受して勤めて富を得よう。この富も，禄を得ることの意味であろう[39]。
□□誠に富を以てせず，亦祇（まさ）に異（ことな）るを以てすと。(季氏16)[40]。
『詩経』に「人が誠にほめるのは富があるからでなく，ただまさに人に相違する美徳があるからである。」と。孔子が，『詩経』小雅の節を引用して，伯夷や叔齊は，首陽山の山麓で餓死したが，人民は今に到るまで，かれらの徳を称賛しているとも述べている。
この富とは，集積した財貨の意味である。
□□死生命有り，富貴天に在り。(顔淵12)[41]。
兄弟子の子夏が，司馬牛に対して，私は，孔子先生から「人の死生も，富貴も天命によるものである。」と聞いておりますと言うのである。次に，孟子の富について，
□□富は人の欲する所なり。富天下を有（たも）てども，而も以て憂いを解くに足らず。(万章上)[42]。
孟子は、「富は人間の欲する所である。しかし，舜は富として天下を自分の物としながら，しかもその憂いを解決するに不足であった。」と述べている。舜は，天下の人々が自分に帰服しても，美人や富貴を得ても，憂いを解くに足らなかった。但，父母の順調な喜びだけが，舜の憂いの解決であったというわけである。
この富も，豊富な財貨の意義であろう。なお，カントは，善意志に触れている[43]。
ゆえに，孔子の富では，「子曰く，富と貴とは，是れ人の欲する所なり。」（里仁４）とあり，この富とは，禄を得ることの意味である。さらに，「誠に富を以てせず，亦祇（まさ）に異（ことな）るを以てすと。」（季氏16）などとあり，この富とは，集積した財貨の意義であろう。次に，孟子の富では，「富は人の欲する所なり。富天下を有（たも）てども，而も以て憂いを解くに足らず。」（万章上）などとあり，この富も豊富な財貨の意味である。しかし，人間は，豊かな富貴（riches and honours;wealth）があっても，健康や人格者として仁徳のモラル（Moral;Morality）などが具備していなければ必ずしも幸福とはいえないと，論者は考えるのである。

第５節　孔子の倫

孔子の倫，すなわち，孔子の言う倫とは何かを問題にしてみる。
□□子曰く，其の志を降（くだ）さず，其の身を辱しめざるは，伯夷･叔齊か。柳下惠･少連を謂う。志を降し身を辱しむるも，言は倫に中（あた）り，行は慮に中る。其れ斯（か）

---

(39) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，155ページ。
なお，「執鞭之士」とは，足軽をいう。賤しい職務の一例として挙げたと言えよう。

(40) 誠不以富，亦祇以異。(季氏16)。この文章は，顔淵12にも同一文があるが，錯簡とされる。この季氏16にあることが正しいと見做される。

(41) 死生有命，富貴在天。(顔淵12)。

(42) 富，人之所欲。富有天下，而不足以解憂。貴，人之所欲。貴爲天子，而不足以解憂。(万章上)。

(43) なお，カントは，『道徳形而上学原論』(*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten,* S.10.)，第１章で，幸福は，幸運の賜物（権力，富，名誉，健康，身の上の安泰，満足感）であるとしているが，しかし，人間が幸福に値するためには，その結果も善意志（guter Wille）が必須な必要条件として思惟されている。
拙著『教育哲学要論』，高文堂出版社，2002（平成14）年４月１日発行，157―158ページ。

くのごときのみ。虞中・夷逸を謂う。隠居して放言し，身は清に中り，廃せられて権に中る。我は則ち是（これ）に異（こと）なり。可も無く，不可も無しと。（微子18），（傍点筆者）[44]。

孔子が言う，その志を高く保ち，自分の身を清く保って侮辱されなかったのは，伯夷と叔齊であろうか。次に，柳下恵と少連を批評した。二人は自分の志を卑下し人からの辱めも甘受したが，しかし，その言語は倫，すなわち，道理にかなっており，その行為は思慮分別にかなっていた。単に，他人の志に屈し身を辱しめるのとは相違するが，それはこのようなだけである。次に，虞中と夷逸を批評した。二人は世を逃れて隠棲して言いたい放題だったが，身の処し方は清浄であり，自ら世から捨てられていても変通自在の権道に合致していた。ところで，孔子自身のことを説明し，我は，これらの超越した人達とは相違して，可もなく，不可もない，ただ時の宜しきにかなっていく人物である，と[45]。

この「倫」（reason）[46]は，理性，道理や道義の意味であろう。柳下恵・少連の「言は倫に中り」とは，言語は道理にかなっている意義である。次に，大倫について，

□□明日（めいじつ），子路行きて以て告（つ）ぐ。子曰く，隠者なりと。子路をして反（かえ）りて之を見しむ。至れば則ち行（さ）れり。子路曰く，仕えざれば義なし。長幼の節は，廃す可からざるなり。君臣の義は，之を如何ぞ其れ之を廃せん。其の身を潔（いさぎよ）くせんと欲して大倫を亂る。君子の仕えるや，其の義を行わんとなり。道の行われざるは，已（すで）に之を知れりと。（微子18），（傍点筆者）[47]。

子路の言葉であるが，孔子の意図が配慮されていよう。この文章の中に，「大倫」（great relation）[48]の熟語がある。「大倫」は，君臣の義という意味である。

次に，孟子における倫を説明する。先の大倫[49]もあるが，人倫の熟語が散見される。

□□庠序學校を設け爲して，以て之を教える。（中略）皆人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして，小民下に親しむ。（滕［とう］文公上）[50]。人倫は人の道の意味。

□□契をして司徒たらしめ，教えるに人倫を以てす。父子親有り，君臣義有り，夫婦別有り，長幼序有り，朋友信有り。（滕［とう］文公上）[51]。人倫，即ち，五倫である[52]。

□□孟子曰く，規矩は方員の至りなり。聖人は人倫の至りなり。（離婁上）[53]。

---

(44) 子曰，不降其志，不辱其身，伯夷・叔齊與。謂柳下惠・少連。降志辱身矣，言中倫，行中慮。其斯而已矣。謂虞仲・夷逸。隠居方言，身中清，廃中權。我則異於是。無可無不可。（微子18），（傍点筆者）。

(45) 注(9)参照。吉田賢抗，前掲書，406ページ。

(46) 注(10)参照。James Legge, *op. cit.*（*THE CHINESE CLASSICS*）, P.337.

(47) 明日，子路行以告。子曰，隠者也。使子路反見之。至則行矣。子路曰，不仕無義。長幼之節，不可廃也。君臣之義，如之何其廃之。欲潔其身而亂大倫。君子之仕也，行其義也。道之不行，已知之矣。（微子18），（傍点筆者）。

(48) 注(10)参照。James Legge, *op. cit.*（*THE CHINESE CLASSICS*）, P.336.

(49) 『孟子』書の「大倫」については，「景子曰，内則父子，外則君臣，人之大倫也。」（公孫丑下）。また，「孟子曰，告則不得娶。男女居室人之大倫也。」（万章上），などの記載が存在する。

(50) 設爲庠序學校，以教之。庠者養也。校者教也。序者射也。夏曰校，殷曰序，周曰庠，學則三代共之，皆所以明人倫也。（滕［とう］文公上）。「学校」の漢字・熟語は，孟子のオリジナルである。亜聖・孟子が「学校」の言葉の創始者であると思考する。注(43)参照。拙著，前掲書（『教育哲学要論』），24ページ。

(51) 使契爲司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。（滕［とう］文公上）。

(52) 拙稿「孟子の人倫哲学論―五倫について―」（論説）『千葉商大紀要』第32巻第３号，千葉商科大学国府台学会，1994（平成６）年12月30日，１―19ページ。

(53) 孟子曰，規矩方員之至也。聖人人倫之至也。（離婁上）。

ゆえに，孔子の倫では，孔子は，柳下恵と少連を批評し，「言は倫に中（あた）り，行は慮に中る。」（微子18）として，この「倫」（reason）は道理の意義である。さらに，孔子の意図を内包した子路の言葉に，「其の身を潔くせんと欲して大倫を亂る。」（微子18）とあり，この「大倫」は君臣の義という意味である。次に，孟子の倫では，「大倫」の熟語も存在して，重大な道の意味もあるが，「聖人は人倫の至りなり。」（離婁上）などとあり，「人倫」（the human relations），即ち，親義別序信の五倫や人間として実行すべき道，人道の意義であると，論者は考えるのである。

Ⅲ　結　　論［孔子の倫理哲学論（４）―道徳論を中心として―］

論者のこの論説，「孔子の倫理哲学論（４）―道徳論を中心として―」における結論としては，帰納法的に次のようになろう。まず，第１節から第５節までの各節について，

［１］**孔子の聖**では，「子曰く，何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。」（雍也６）とあるように，この「聖」（a sage）は聖人の意義である。孔子は，「聖人は吾得て之を見ず。」（述而７）と言っている。今の世で聖人を見ることが出来ないだけでなく，孔子自身も聖人と認めていない。ところで，戦国時代の亜聖･孟子は，「孔子は，聖の時なる者なり。」（万章下）として，孔子を聖人と是認していると，論者は思考するのである。

［２］**孔子の賢**では，「子曰く，賢を見ては，齊からんことを思い」（里仁４）とあり，この「賢」は，自己にまさったすぐれた人の意味である。さらに，「子曰く，賢なる哉回や。」（雍也６）とあり，賢明や賢人の意義であろう。孔子は，顔回や柳下恵，伯夷と叔齊を賢人達と是認している。次に，孟子の賢については，「孟子對えて曰く，賢者にして後此を樂しむ。」（梁恵王上）とあり，「賢者」の熟語がある。正に，賢い者の意味である。さらに，孟子では，「賢聖」などの熟語も存在すると，論者は考えるのである。

［３］**孔子の生**では，「曰く，未だ生を知らず，焉んぞ死を知らんと。」（先進11）とあり，この「生」（life）は，生きるの意味である。さらに，「子曰く，志士仁人は，生を求めて以て仁を害すること無し。」（衛霊公15）などとあり，この「生」は，命，生命の意味などである。次に，孟子の生では，「生を養い死を喪して憾無きは，王道の始めなり。」（梁恵王上）とあり，生者の意味である。さらに，生前の意義などがあると，論者は考えるのである。

［４］**孔子の富**では，「子曰く，富と貴とは，是れ人の欲する所なり。」（里仁４）とあり，この富とは，禄を得ることの意味である。さらに，「誠に富を以てせず，亦祇（まさ）に異（ことな）るを以てすと。」（季氏16）などとあり，この富とは，集積した財貨の意義であろう。次に，孟子の富では，「富は人の欲する所なり。富天下を有（たも）てども，而も以て憂いを解くに足らず。」（万章上）などとあり，この富も豊富な財貨の意味である。しかし，人間は，豊かな富貴（riches and honours;wealth）があっても，健康や人格者として仁徳のモラル（Moral;Morality）などが具備していなければ，必ずしも幸福（happiness;Glück）とはいえないであろうと，論者は思考するのである。

［５］**孔子の倫**では，孔子は，柳下恵と少連を批評し，「言は倫に中（あた）り，行は慮に中る。」（微子18）として，この「倫」（reason）は，道理の意義である。さらに，孔子の意図を内包した子路の言葉に，「其の身を潔くせんと欲して大倫を亂る。」（微子18）と

あり，この「大倫」は，君臣の義という意味である。次に，孟子の倫では，重大な道を意味する「大倫」の熟語も存在するが，「聖人は人倫の至りなり。」（離婁上）とあり，「人倫」(the human relations)，すなわち，親義別序信の五倫や人間として実行すべき道，人道などの意義であると，論者は考えるのである。

ところで，なぜ孔子は，これら聖，賢，生，富，さらに，倫などの倫理，道徳哲学を主張したのかが問題であろう。先ず，それは古代中国，周の春秋時代の状況とも関連して，聖人･孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に，春秋時代は，迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり，その再建に対して，孔子は，周公旦を理想的な人物像とした。周公旦は，周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた偉人と目されよう。

□□子曰く，甚だしいかな，吾が衰（おとろ）えたるや。久しいかな，吾復（また）夢に周公を見ず。（述而７）[54]，

と嘆いた如く，孔子は，政策的に善き国家建設のビジョン（Vision）を持ち，その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。

そのことは，以前の論説における孔子の仁，義，礼，知，さらに，信や愛の哲学はもとより[55]，学，道，徳，善や天の道徳哲学など[56]，また，今回の論説におけるこれら聖，賢，生，富や倫などの孔子の倫理，道徳哲学は，人間としての基本的な理念（Idee）であり，眼目であったと，論者は思考するのである。

さらに，論者のこの論文，「**孔子の倫理哲学論（４）**」では，ロゴス（logos）的に体系化（systematization）して，その中身を「哲学する」（philosophieren）[57]ことを試みたのである。

よって，このような内容により，論者の「**孔子の倫理哲学論（４）―道徳論を中心として―**」［Confucius’ Philosophical Theory of Ethics (4)―Attaching Importance to His Theory of Morality―」の**論説**は，過去，現在，未来の三世に渡り，多少なりとも意義と価値があろうかと，論者は考えるのである。

…… {2008（平成20）年10月１日（水曜日），原稿提出} ……

⑸④ 子曰，甚矣，吾衰也。久矣，吾不復夢見周公。（述而７），（傍点筆者）。

⑸⑤ 拙稿「孔子の道徳哲学論―四徳（仁，義，礼，知）論を中心として―」（論説）『千葉商大紀要』第42巻第３号，千葉商科大学国府台学会，2004（平成16）年12月31日，１―15ページ。

⑸⑥ 注⑹参照。拙稿，前掲論文［「孔子の倫理哲学論（１）」］，83―99ページ，など。

⑸⑦ 注⑴参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865-A838, B866, S. 752-753.

〔抄　録〕

孔子の倫理哲学論（４）
―道徳論を中心として―

浅　井　茂　紀

この論説は，目次，Ⅰ序論，Ⅱ本論，第１節孔子の聖，第２節孔子の賢，第３節孔子の生，第４節孔子の富，第５節孔子の倫，Ⅲ結論，から成立している論文（注付）である。

孔子の聖，賢，生，富や倫とは何かを問題にしてみた。それらの根拠として，儒学における『論語』や『孟子』などの出典を提示して，各々の内容を分析や総合し問題にしてみた。また，中国古代，孔子は，仁，義，礼，知，信や愛はもとより，なぜそれら聖，賢，生や富，さらに，倫などの倫理（Ethics），道徳哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にし，吟味してみたのである。

つまり，孔子の倫理哲学は，人間としての基本的な理念（Idee）ではなかろうか，ということをロゴス（logos）的に体系付けて，その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

―Abstract―

Confucius' Philosophical Theory of Ethics (4)
―Attaching Importance to His Theory of Morality―

ASAI, Shigenori

This paper aims at clarifying Confucius' thoughts, and comprises the Contents,
Ⅰ. Introduction, and Ⅱ. Confucius' theory. The theory comprises
Ⅱ.1 Confucius' thoughts on sage, Ⅱ.2 Confucius' men of worth,
Ⅱ.3 Confucius' life, Ⅱ.4 Confucius' riches, and Ⅱ.5 Confucius' reason.
The final is Ⅲ. Conclusions. (Notes appear at the end of the paper).

It hereby remains to be seen what Confucius' thoughts on sage, men of worth, life, riches, and reason are. As the grounds for clarification of these items, details of the individual items are analyzed and later synthesized to take them up as problems by giving sources such as Confucian Analects, The Works of Mencius, etc. in Confucianism.

At the same time, it is discussed why in the olden time of China, Confucius advocated ethics and moral philosophy such as Confucius' thoughts on sage, men of worth, life, riches, and reason with regard to benevolence, rights, propriety, knowledge, sincerity, and love, etc. Furthermore scrutiny was also made with these matters.

That is to say, the paper intends to make observations in connection with the significance and value by systematizing them in a logostic manner with a view to explaining whether Confucius' ethical philosophy is the fundamental ideas (Idee) as a human being or not.